一九九四年の猛暑を思い出す

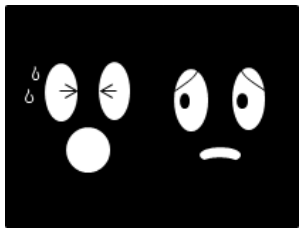
駒木　智
（駒木小児科クリニック・熊本市）

一九九二年一一月に北海道から熊本に来ました。一九九三年に熊本大学小児科大学院に入学。小児科医局から基礎医学棟へ実験のため産業道路をよく横切るのですが、五月のＧＷにはすでに三〇度、実験道具を持ちながらの信号待ちが長すぎて、太陽光線が私の頭を照りつけ、私の身長がどんどん縮まっていくという、不思議な、まずいぞ、これという感覚を持ちました。

翌一九九四年、熊本の猛暑はすさまじかった。調べてみると三五度以上の猛暑日が四一日間熊本でもあり、七月一六日には最高気温三八・八度、これがしばらく続き八月の月最高気温平均は三五・一度でした。

その七月の暑い日の夜、大学院生の私はいつものように夜の一二時を過ぎて実験しておりました。医局の蛍光顕微鏡のための狭い暗室に入りました。内側のドアノブが壊れており、部屋の中に入ると、その部屋にはクーラーがなく、冷蔵庫の熱もあり四五度くらいでしょうか。そんな中何かの拍子にドアを閉めてしまったのがあとの祭り。真っ暗になったのはいいのですが、密室の中、ドアノブが壊れていて、内側からこの重厚なドアは二度と開きません、閉じ込められました。この時は焦りました。小児科医局の片隅の部屋で、さすがに〇時を過ぎると周りに人もいません。一緒の宮崎県出身のＫ先生は平気そうでしたが、朝までいると確実に命はないな、と思いました。

大きな声で「開けてくれー！」と何度叫んだでしょう。どのくらいたったのか、でもきっと五分くらいですが、他の院生がたまたま我々を救ってくれました。ずっと暗室の中一緒でしかも黙っていたＫ先生は、私の半狂乱に「先生って、生きるパワーがすごいんだね」と言いました。パワーも何も北海道人には、熊本の暑さは無理です。



その後、暑い時にはこの時のことを思い出しています。私の暑さ対策です。

今、ネットで調べてみると、ＧＷに三〇度になることは熊本でも殆どないようなので、一九九三年のあの不思議な身長が縮んでいく感覚は、時期が違うのかも。ひょっとして、暗室に閉じ込められたのも一九九四年ではなかったような気もしてきました。熊本の夏は全てが幻になります。